「半年間続いた耳管開閉症」―②治療―

カイロプラクティック・コンディショニング・ルーム・K
菊地光雄 B.C.Sc

〈治療〉

検査反応で陽性項目の緊張パターンからリラックスパターンの切り替えを丹田に呼吸に合わせて「振動刺激」を加える。治療後は各陽性反応で緊張パターンが陰性に切り替わっているか再検査をして確認する。

1回目治療（9月2日）

各陽性反応が陰性になる。

2回目治療（9月12日）

聴覚：「同僚、話の内容」で陽性反応あり。この陽性反応は聴覚で新しい同僚の反応がでる。

1回目の治療後自主的に薬の服用をやめる。

3回目治療（9月15日）

治療前の問診で症状の確認「大きな音が聞こえる」が改善する。若干耳鳴りあり。フワフワめまいなし。

4回目治療（9月23日）

各症状改善する。3回目までの各陽性反応は陰性になる。

4回目の治療は「気にすれば気になる耳鳴り」の治療を行う。

聴覚：「部下、電話の話し方」で陽性反応あり。

5回目治療（9月29日）

前回までの各陽性反応は全て陰性になる。

全ての症状は改善する。

1カ月後に各陽性反応を示した緊張パターンの再検査を行うが、全て緊張パターンから開放されている。主訴としていた症状の再発なし。

4回目の治療後に患者がこのようなことを言った。「そういえばこの人事の問題がでてきたのは3月からでした」ストレスと症状の発症が同じ時期だったことで患者自身も症状と職場の人間関係のストレスが関係していたと何となく感じていたようだ。

まとめ

「耳管開放症」は機械的にみると耳管の開閉に関わっている「口蓋帆張筋」と「口蓋帆挙筋」の筋機能異常による結果として耳管の開閉が機能しなくなったと考えられる。筋機能は神経支配であることに目を向ければ筋機能異常は神経機能異常が関わっていることがわかる。

さらに神経機能異常も結果として捉え、神経機能異常を引き起こす原因を追究することで本質的な機能障害の治療が成立し再発の可能性が少なくなると考える。

神経機能異常を引き起こす原因として自律神経系を乱すストレスの影響力は大きい。

日常のストレスで自律神経が乱れて胃腸など消化器系に起きる障害は代表的な例であるが、同様に自律神経の乱れによって他の器官（筋骨格系含む）も機能異常が起きることも否定できない。

日常の反復される情報は五感を通して脳の学習となり「脳の可塑性」という特性が情報ネットワークを形成し顕在的に想起されない情報が条件づけされると考える。顕在的に想起されない記憶として運動技能の記憶、条件づけ、プライミングなどの「手続き記憶」ある。

過去の体験的なもの、あるいは自己の思考パターン、信念、教育などあらゆる繰り返される情報は条件づけされ「手続き記憶」すなわち長期記憶として潜在的に落とし込まれて想起されない記憶として存在し、現実の情報と一致するとネットワークで結ばれている情報が想起され神経の緊張がパターン化するのではないかと考える。

今回の症例は、本質的な原因を「身体と心の関係」からアプローチして脳が学習した顕在的に想起されない情報ネットワーク化された緊張パターンをPCRT特有の検査方を使って見つけ出し神経の緊張パターンからリラックスパターンに切り替えて、神経機能異常を改善したことが症状の短期間で改善した症例である。

現状では、このような機能的疾患の画期的な治療法が確立されていないため長期的で緩慢な経過をたどることがあり、その結果患者は代替医療に改善を求め訪れることがあるが、病理的なもの、機能的なもの鑑別診断は重要であり、代替医療家が全てを負うものではなく専門医との併用も必要になることも視野に入れて進めていく必要がある。

PCRTは患者の思考との関わりを持つため、患者とのコミュニケーションを密にしてラポールの構築は不可欠になる。そのため術者の資質が問われることも十分理解しなければならない。筆者も資質の向上が今後の課題となる。

［参考資料］

（参1、2）
フリー百科事典ウィキペディア
（参3、4）
耳管開放症ホームページ
（図1、2、3、一部修正）
ネッター解剖学第2版